

名人 嶋 数男(87) 郡上市八幡町
聞き手 清水 克彰 郡上高等学校3年

平成14年取材

職人つてもものはね、 材料がなくなるのが一番寂しいんだよ

1. 昔

昭和30年代に竹細工の組合があつたけど、その中で魚籠を作っていたのは、親父を合わせて郡上に3人しかいなかったんだ。私は兵隊から帰ってきた時24歳で親父もまだ60代、作っていたあと2人は親父より少し若い人だったけど今では死んでしまつて、もう俺しかいなかった。今は遠くからこの郡上魚籠を買いに来てる人が居るけれど、その時代は、釣りは趣味でやるのではなく、生活のためだったので、魚を釣っていた人しか魚籠は必要とされず、あまり売れなかったんだ。

竹やフジは生活に密着していた。竹やフジ蔓は丈夫でこの山にも生えていたからね。フジを編むには技術もいらなかったし、お金がかからない。そして昔は時間もたくさんあったんだ。

さんあつたんだ。フジ細工をしていたのは、ほとんど農家で、今90歳ぐらいの人が作っていたのかな。農家だから主に野菜入れとして作られていたんだ。フジで作ってるからよく空気も通して野菜にも良いしね。フジの繊維で織った野良着も作っていた。

今は、もうそんな事せずに物は買うばかりでしょ。その時代はテレビもラジオもないから、そういう物を作る時間もあつたし、生活にゆとりがあつたんだよね。今日では文明が進歩して便利にはなつたのは確かだけど、生活にゆとりが無くなって味気無いね。

2. フジ細工について

山フジは、杉、松等を養林している山林主にとって山の被害を受けるから嫌われて

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもつてその業を極め、他の模範となつてゐる達人で、毎年、全国で約1000名が選定されています。岐阜県においては、現在、23名の「森の名手・名人」がいます。

この「森の名手・名人」を「森の聞き書き甲子園」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から、話題の関係を抜粋したものです。

なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

いる。大きな木も山フジに巻かれたら数年もたてば枯れてしまう。根元からフジを切つてやると巻いたフジが緩み、ものすごい音が山にこだまする。私にはその音が木の喜びの声に聞こえてくる。

フジ採取には郡上地域の山は、大体自分の足で歩いているね。遠い所では福井県の九頭竜、飛騨の山、長野県まで行つてフジを採取しているよ。

職人つてもものはね、材料が無いと一番寂しいんだよ。倉庫にある材料が少なくなつていくとそりゃ寂しい、銭が無いより寂しいね。

フジ作工は、そのかご等からどんどんデザインを変えていったんだ。毎年、フジの作品の展示に東京や名古屋などに行くんだけど、デザインは自分の頭の中で考えていくほかに、お客さんからの意見も参考にす

る。お客さんの声が直接聞けるから、私は都会に展示するんだ。

実はこのフジ細工は、都会向けなんだ。身は郡上に、心は常に東京にいるんだ。

3. 魚籠について

魚籠は、作れるようになるには、だいたい約10年かかるんだ。魚籠は年中作れるわけではなく、作る期間は秋から春のたった半年間だし、竹の良し悪しを見分ける為の力、目利きも3、4年かかる。

今はもう俺も年で、一人で竹を切り倒すことができないようになってしまったから、俺が直接山へ行つて、竹をみていい竹に印をしてね、向こうの若い人に竹を切つてもらうんだ。

いい竹っていうのは、土地によって決まるんだ。竹に含まれている水分によって良し悪しは決まる。川に近かったら竹は多く水分を吸う。うちはね、本当は山の竹がいいんだ。でも今は山の中に竹が無くなった。だからしょうがないから川のそばの竹でいい物を探して使っているんだ。昔の山の竹をちよつと切つて割つて見るとね、竹の紙、竹紙がふわふわとたくさん出てくるんだ。でも河原の竹は、水分をたくさん吸ってるからね、全然その竹紙は出てこないんだ。

一番の良竹は、杉山のそばに生えているんだ。山の竹が無いから河原の竹を使つてるけど水分が多いからね、2ヶ月間ぐらいは竹をそのまま自然に乾かして使った。でも今はもつと早く乾かすために、竹を割つてから乾かすんだ。今はね、本当にいい



魚籠を作成中の嶋さん

条件の竹は少なくなつてまつたな。

よい竹を作るには環境も大切だけどやっぱり手入れも必要だね。河原でも山でも手入れをしないと竹が悪くなるんだよね。手入れはいい竹ばかり切つてもダメで、竹を倒さないといけない。よい竹を残して竹に日を当てないと育たないし、倒した悪い竹も肥料になるからね。

いい魚籠を作るにはその魚籠を作るための材料の竹作りから始まるんだ。

魚籠の特徴は、逆さ合掌造りの形状にある。アマゴやイワナを詰め込んでも重さが分散する仕掛けになっている。節と節の間が45cmある竹が丁度良くて、そういう長さが比較的好い竹は九州にある。九州はここより暖かいから良く伸びるんだけど、郡

上の竹に比べて比較的柔らかい。だから花かごとか飾つておく物には丁度良いんだけど魚籠等、道具になると丈夫じゃないからもつと固めの竹じゃないとダメなんよ。とか言つても寒い地域の竹は節と節の間が短くて魚籠には使えないんだね。

この周辺の竹の比較的大きくて固めの竹を探して使うんだけど、少し竹が固くて使にくいからね、竹を切つて竹の皮を削つてから、それを乾燥させて水につけておく。水と太陽を使って竹を柔らかく使いやすくなるんだ。

竹の皮を取ると、竹の皮は空気を吸ってるんよ。だから皮を取つてしまうと空気をたくさん通してくれる。そして魚籠の中に空気を通すから魚が悪くなる事も無いしね。

皮を取る事にはまだ意味があるんだよ。皮をはいた物にえ油という物を塗るんだけど、竹はそれをよく吸い取ってくれるんだね。

そのえ油は完成した魚籠に、中と外に1日1回塗つてそれを天日に乾かす。それを7回、7日間続ける。油がよく染みてその油のおかげで魚と魚籠の竹同士が滑つて魚を傷つけない、そして水自体をはじくから竹にもよくて魚籠が長持ちするんだね。

その油は、塗っていくほどに魚籠の色がどんどん濃くなって深みが出るんだ、釣りだから外で使うでしょ、だから日に当たつて日焼けしたり魚の油もしみこんでいくから使えば使うほどいい色が出るんだ。油を塗るなど、手間をかけてあるから、魚籠の為にもなるし、竹は殺菌効果もあるから魚の為にもなる。

この魚籠をよう見ると編みである竹と竹の間に隙間が見えるやろ。竹の厚さを変えることによつてこの隙間ができるんよ。竹を厚くすると隙間ができて、細くすると隙間がなくなる。他の魚籠はあまり隙間がないんだけど、この隙間が魚には良いんだ。お客さんには普通の魚籠と自分の魚籠の編みである写真を見せて、違いを見てもらっているんよ。



嶋さんが作った魚籠

よくこれを芸術品として売ってくれという人がいるけれど全部断つてるんよ。うちは魚籠を道具として作ってるけど、床の間に花を飾るもんじゃないしな。

静岡からや東京のアマゴ釣りやイワナ釣りの人が郡上魚籠を買いに来てる。一番遠い所で北海道からかな。わざわざ直接買いに来てくれた人もいたんだ。

この魚籠を持つてゐる人は、郡上の人よりも都会の人が多いんだよね。

魚籠Ⅱびく
竹紙Ⅱちぐし